

幼児の絵画製作

の新しい方向

林 健 造

① 現代っ子と情緒の教育

この夏の林間学校に六年生をつれていったときのことである。

校長の坂元先生は松虫草の花が大好きで、その薄紫色の可憐な花の一枝を示しながら、「四、五年前の子どもたちと違ってこの頃の子どもは、もう松虫草などというものに何にも関心を示さなくなっただね」と述懐されていた。

そういえば郭公がいないいても、「あれは鳩時計さ」といつてきかなかったという。幸い郭公が十三声ないので、時計ではない証明になったなどは、笑い話みたいな事実である。

三年生の子どもたちに、「こうだったらいいなあ」という絵をかかせたら、こんな絵がでてきた。

五円玉を地中に埋めて、水をかけて育てる。一カ月たったら十円玉が二つなった。半年たったら千円札が十枚程みもった。一年たったら、木のまわりは一万円で埋まったというのである。

現代っ子は金にガメツイというが、これなどは面目躍如たるものがある。

幼児でも、現代っ子であることには、御多分にもれない。ある母親が、何でも早目に教えておくに限るといって、街角で交通整理をしているおまわりさんを指して坊やに、あれはどうして立っているか知ってる？ と聞いたら、坊やは「足で立ってんのさ。」と

「答えたので、母親は頭にきたという。」

そんなことで、いちいちしゅんとなったのでは、とても現代っ子の教師や母親役はつとまらないだろう。

ともあれ、現代っ子の問題で、その一番欠けている面といえは、主体性の欠如や人間疎外の問題であろうが、何か全体的な調和がどこかで大きく崩れているのではないかと思う。

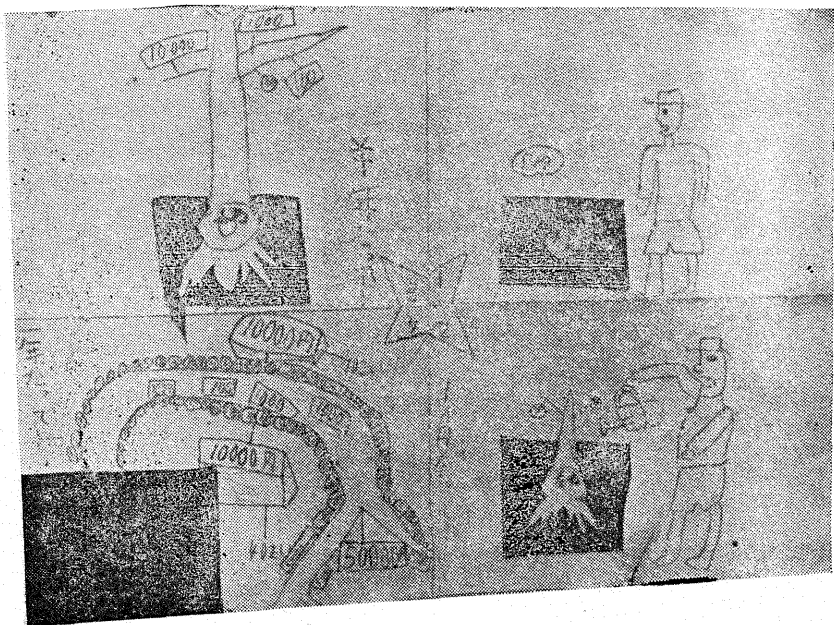
最近、岡潔氏の「春宵十話」を読んで、大いに感銘したが、その中に、

「教育というものは、動物性の上に人間性を接木するようなものである。ところが、最近の教育は、動物性の上に、また動物性を接木しているようなものである。」

例えば、渋柿の上に甘柿を接木するものだが、渋柿に渋柿を接木しているようなものである。しかも渋柿は、きわめて成育が早い。すべて生育は、早過ぎるより、遅い位がよい。とくにこの動物性が女性の顔に多く表われている。」と述べておられる。

また、「人間の中心は情緒にあるのではなからうか。今の教育は知識ばかりで理解させようとしている。情緒がぬけたら、本当の体得したことはない。それはあたかも、汽車の時間表を教えて、汽車にのり方を教らないようなものである」と述べている。

同時に、岡氏は絵画教育の大切さについても、新しい角度から述べておられるが、とにかく大いに教えられるところが多かった。



幼稚園の教育というのも、幼児が動物性の最も豊かな時ではあるが、やはり、人間性の接木することを考えていくことをふまえて行なわなければならないのだろう。

今年の一月、青森の函工の研究会の時、沖縄から参加した一青年が、始めて見る雪にまったく感歎して、こんなことをいつていた。「雪って、まんべんなくどこへでも降るものですね。屋根にも、田んぼにも……。そしてどこにも同じ高さに降るのですね。田の中のあんな細い竿の上にも。」

この当り前のようなことに、ひどく驚いた彼のことは、誰もが笑えなかった。なんと新鮮な見方であり、なんと立派なことばだろう。

美術教育で育てたいことは、まさにそういうことなのだ。教育とはそういうものなのだ、私は私なりに受けとって心をうたれたものだった。

② 蝶は蛹にないを教える？

幼児の絵画製作の問題も、いろいろわからないといわれることが多い。

どうしておとながものの形の描き方を教えてはいけないのだから。松の枝ぶりはこう、汽車の描き方はこうと、ちょうど、文字のあはこうかく、数字の2はこうかくというように……。

これは自己表現が自分の手だてを通してでないと絵の教育の意味がなくなることに、それに根本的に、おとなの表現と、子どもの表現は違うということが、記号学習のようにはいかなない原因であろう。

「おとなは見たまを描く、子どもは知っていることを描く。」
例えばリンコを描くのにおとなは、形や明暗など外觀を描くが、子どもは、喰べた経験を描く。しばしば切断面のような絵をかいて、たべられないところとか、種子などでもいいねいに描いていることがある。

大食の男にびっくりした子は、おなか一ぱいごはんがつまっている絵をかくなど、いわゆるレントゲン画といわれる形式や、展開図のように、食事をしているはずの家族が、みんなテーブルのまわりに寝ているように描く絵などに見られるように、子どもには独特の表現がある。

これは、あたかも蝶と蛹の関係に似ているとある学者はいう。
なるほど、松の枝ぶりなどの描き方を教えようということは、蛹に蝶が羽根の動かし方を教えているようなもので、関係ないことで、生きた教育にはならない。

だから、おとなのわれわれが指導するということは、描き方ではなくて、描きたくなるような環境をととのえてやったり、描くことを励ましたり、よい相談相手になってやったりすることである。

でも、描き方を教えないと、子どもは間違った表現をします。

教師はそれでもなおしてはいけないのですか”

と心配されるかもしれない。これには、今から四十年ほど前、自由画教育を提唱し、今のようにな新しい創造的な美術教育の必要をとなえた山本鼎氏が、そのころに、こんな名言をはいている。

「それは何もがめることがないと困ってしまう巡査みたいなものである」と。

ただ、一応子どもの表現の仕方は、やはり教師は知っているといることは必要である。もし何を描いているかが解らない場合は、その子どもにお話をしてもらうことで容易にその絵の中に参加できるだろう。

③ 水割造形には栄養はない

さて岡氏のことばのように、急ぎ過ぎが幼児の絵画製作の教育にもないだろうか。

何でも、明日の指導にすぐ役立つものを、次から次と吸収していく。これはうちの小学校では五年でやっつてることだがということすらある。

いったい、歴史をふりかえって見ると、幼稚園の方は、小学校や中学校の美術教育よりも、本もので、確かなものから出発している。

フレールベルが創案した恩物教育も、宇宙の精神を知らせ、神の認

識にいたらしめるという大理想から出発している。

しかも、今新しく造形の体系とか造形の基礎練習などが問題になっているが、この恩物には、遊具体系、作業具体系といった系列や造形教育のためのすばらしいアイデアがいっぱいある。もう一度、ここから研究しなおすことが幼児の造形教育のために本当に必要なことだと思う。

これに比べて、小学校の出发はまったくひどい。手がかりがつかぬまま、専門家の学習コースから借りものをしてきたのである。だから、いつまでたっても、芸術家のジャンルや、芸術意識から脱けだせない。画家、彫刻家、版画家、デザイナー、工芸家意識が今日も統いている。

私はこのおとなの造形を水でうすめて、子どもに飲ませればよいというものを「造形水割論」といっている。

新しがり家の幼稚園の先生が、自分の本家の生酒を味わわずに、どうして水割の酒を追いかけて飲むのかふしぎである。

子どもの絵は、子どもたちが描きたいものを、子どもたちの方法でのひのひと表現させてやることだ。という今日のやり方にいたるまでには、大分長い時間をかけた。おとなの絵手本を臨画させたり、酒瓶とリンコを写生させたり、瀬戸ものの果物やハケツを写生させたりした時代を通過してきた。酒瓶とリンコを描かせることも、おとなが当時そのような静物画を描くことが流行していたのを

もちこんだに過ぎない。いわゆる水割根性なのである。

子どもから出発したものを、などというのは、ごく最近のことであろう。

子どもは生来すばらしい創造力をもっている。おとながそはから抑圧を加えなければ、その力はいきいきと発揮できる。したがって逆に、子どもが自由に表現したものは、その子どもの感情や考え方の表われたから、絵を通して、その子の感情や性格がわかる。子どもの絵は心をのぞく眼鏡である”として、ガイダンスにも活用されたのも創美という運動がおきてからである。

④ 創造力の二つの面

ところでこの創造力であるが、造形活動を通して養おうとする創造力には二つの方向がある。一つは感情を卒直に表現する領域で、ここでは、まったく主観的・無条件で、心に思ったことを、自由に表現していくことによって養われる創造力である。他の一面は、ある目的があり、それを達成するためにいろいろと思考していく、したがって合理的・客観的・条件的な場の造形を通して養われる創造力がある。この二つの面の学習は、相当異なるところがある。

よく前者は心象とか感情表現とかいわれる領域であり、絵や粘土製作が中心になっている。後者は機能とか適応表現といわれる領域で、デザインとか製作活動が中心である。

日本では、どちらかというとき、この感情表現の世界だけやっていると、機能表現の面が、いたってなおざりだったといっている言ひ過ぎであろうか。

とくに幼児の場合など、幼児に役立つものなどという分野は、抵抗が大きく無理だからということでも、もっぱら感情表現だけということが多かったようである。製作にしても、感情表現的なものにおわっていたようである。

たとえば粘土は、象とわにさえ作っていれば、先生はごきげんだし、お団子作りの子は、創造力がないとして冷視されることはなかったろうか。

お団子を作っている、なるほど何も作ることもない無気力な子が、しらずしらずまるめているお団子作りもある。中には、先生ごちそう作ってあげるからね”という意欲的な子もいる。木の葉のお皿にのせてもってくる途中、ころがってしまつて、”やっばりお皿じゃだめね”などと今度はどんぶりを作ってきたりするのは、幼児が機能についての創造力を発揮している姿である。

そうを作らなかつたばかりにみそもくそも一しよに非創造的であると片づけられては、かわいそうである。

横須賀の諏訪幼稚園で、何かでお菓子をはくはる時、その入れものを画用紙で作らせたら、いろいろな形を作ったが、さてお菓子を入れてみたら底がなかったりして、とても愉快な保育ができたという。

この幼児の機能表現の分野の開拓と重視が、当面の幼児の造形指導の最も大切な問題だと思ふ。

⑤ 「絵の離脱」から学ぶこと

子どもは絵を描くとき、ある形を覚える。しばらくはその形を使う。それからまた一歩ぬけだして新しい形を覚えていくという過程を通る。

いつまでも同じ形に留まっている時は、人はあまり伸びていない。創造的だということは、フロムのことばにもあるように「毎日生まれかわろうとする能力」であるから、次々に新しい形へ離脱していくことであろう。

「いつも同じ絵ばかりかいている子は、どうしたらよいでしょう」という質問もここに関係する問題である。

よく紙形の変ったものを与えたり、描画材料をかえたり、テーマを与えたりするという答はきいているが、最近和訳されたアメリカのローウェンフェルド博士の「美術による人間形成」という本の中に、たいへんいいことがかいてある。

離脱のためには次の三つの原則的なことがある。

- 1 重要な部分の誇張
- 2 重要でない部分の軽視や省略
- 3 情緒的に重要な部分の象徴の変化

次頁の人の絵は、そのことがよくわかる。

①の絵は、「人を描きましよう」ということでかいた絵。鼻は横むき、眉・目は正面向きとフロンタリテイの法則がみられるが、ここで問題なのは、この子が知っている型でただ様式的に再現したので、どここの誰れとか、この人がという何もない絵である。

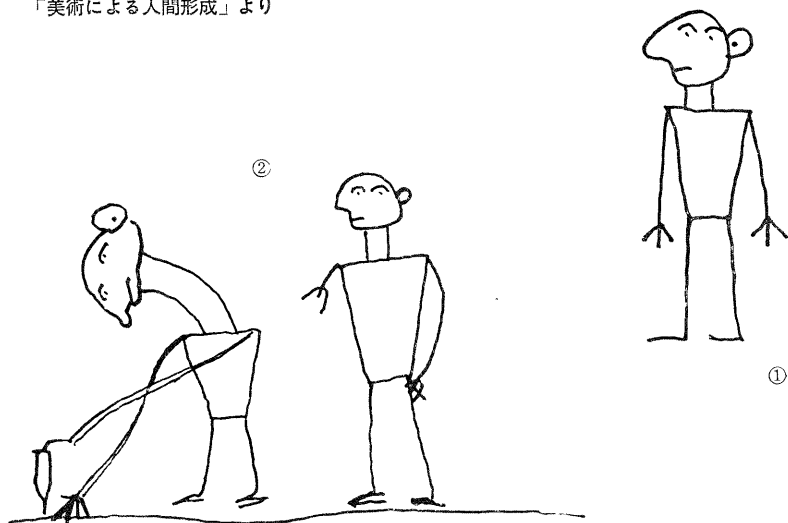
ところが②の方は「なくした鉛筆を探す」というのでかいた絵で、ここには、あらゆる離脱の条件が入っている。

左と右の人は同じ人で、左は拾うところ、右は拾いおえて、ポケットにしまふところである。

子どもは鉛筆をつかんでいる一方の腕を指しながら「この手でいまちょうど鉛筆を見つけた」といった。腕は、重要な役割を果たすために二本線で描かれている。鉛筆も重要なので誇張されている。右の絵は拾いおえてもはや、重要でなくなった右手は小さくかかっている。「この手でポケットへ鉛筆を入れる」といいながら左手だけをかいている。

拾うために強調された首、しかも体を曲げていることからおき直ったことを示すための脚の長さなども変化があってもおもしろい。

また②の絵には地平線が描いてあるが、この地平線は重要な意味をもっていて、私は地に立っているということ、つまり、自己と環境の関係を知ることになったことで、いわば社会性の発達の芽がでたことであるといっているが重要な発言であると思う。



この絵も身体的な経験が、絵の離脱に効果をあげた例であろうが、ローウェンフェルド博士の実験には、もっとわかりやすい例がある。

ある級にいったら、どの子の絵も人物の口がみな一文字の線だけで描いていたので博士は、ポケットにわざときたいお菓子をに入れていき、カラカラとならしながら、「どんなお菓子が入っていると思う。軟かいのか、堅いのか」と聞いてから、みんなに配り、合図があるまで見せておき「さあどのくらい堅いか、かんでたべてごらん」といった。

その直後「お菓子を食べているところ」という絵では、どの子の絵もまぎれもなく歯が描きこんであったというのである。

これは一つの美術上の刺激であるが、とくに肉体を通して経験させるということに特徴がある。

博士は、手のために、目のためになど、次のような題材例をあげている。

- ・私とおかあさん(大きさ)
- ・私は鼻をかんでいる(鼻)
- ・私は膝をすりむいた(膝)
- ・私はスプーンとフォークで食事をする(手、腕)

これを見て考えさせられることは、われわれが使っている題材で

ある。

行事をただ追いかけているのもある。三月おひな様、五月鯉のほり式のもの。または何の系統や意図もなく日曜日とか、遊園地へいったことなどの例である。

この子どもたちに、何のために、あるいは何を伸ばそうとして題材を選ぶのが、きわめて不明瞭なことはなかったろうか。その意味では、ローウェンフェルドの題材の与え方、とらえ方に大きな示唆をうけるのである。

最後に、すばらしい子どもたちのことをうたったもので、しかも教育者や親はどういう役割をもつのかを、われわれに教えてくれているレハノンのカール・キブランの詩をあげよう。

“あなたの子どもは あなたの子どもでない。

彼らは人生の希望 そのもの

息子であり 娘である。

彼らは あなたを通じてくるが

あなたから くるのではない

彼らはあなたと共にいるが

あなたに属しない

あなたは 彼らに愛情を与えてもよいが

あなたの考えを 与えてはいけない

何とならば

彼らは 彼ら自身の考をもっているからだ。

あなたは彼らを家に入れてもいいが

彼らの心を あなたの家に入れてはいけない

なぜなら 彼らの心は

あなたが たずねてみることもできない

夢の中でさえ

たずねてみることもできない

あしたの家に すんでいるからだ

あなたは

彼らのようになろうとしてもよいが

彼らをあなたのようにしようとしてはいけない

なぜなら 人生は 後戻りもしなければ

昨日と共に ためらいもしないからだ”

(静岡創美小冊子より)

(秋田市幼稚園講習会における講演より)

* * *